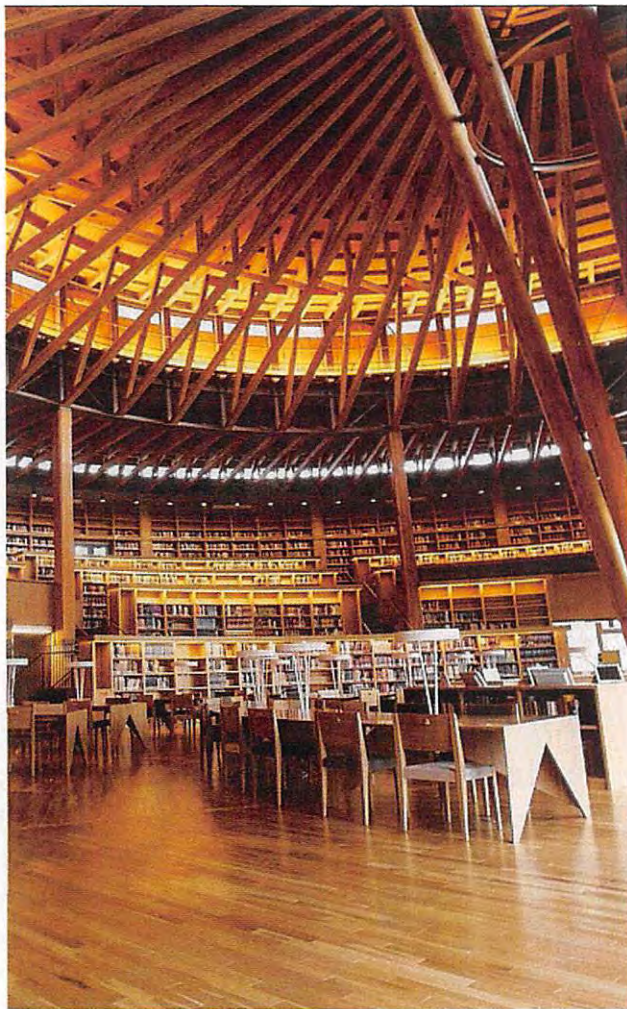


LIBRARY NEWS

第12号



図書館

世界に羽ばたく人材育成 英語教育と教養教育

公立大学法人
国際教養大学 理事長・学長

中嶋 嶺雄



ー 本日は、国際教養大学 (AIU; Akita International University) 学長中嶋嶺雄先生に、お話を伺いたいと思います。大学設立の段階に、込められました思いや設立準備の際の経緯含めて、ご紹介願います。

中嶋 日本の高等教育についての危機感と、長く大学に関わってきたある種の使命感があった。秋田県が国際系の大学を作りたいという要望があり、少子化の時代、大学が多すぎる時代に、普通の大学を作っても意味がないので、従来の日本の大学と根本的に違う大学ならば作る意味がある、お手伝いしましょうと言う事で始まりました。

僕はずっと国立大学にいたものですから、国立大学が如何に駄目かと言う事を身をもって知っていたわけですから、それが反面教師になりました。東京外国語大学は、国立大学の中でもいろいろ努力はしてきたつもりですが、国立大学全体を見てみれば、先ず意思決定がほとんど、明確ではない。それから時間ばかりがかかる。会議が長い。そしてカリキュラムの改革をしようと思っても改革出来ない。そう言った大学運営の根本を変えなければいけない。従ってAIUの場合は、すべての教職員は三年間の任期制、授業はすべて英語、全寮制(二年次)、全員が海

外留学をして、一年分の単位を海外提携校で取得。提携校も10月末現在11校になります。ほとんど世界のトップクラスの大学です。学生たちはTOEFLのPB T550点をクリアしないと留学できない。留学できないと卒業もできないというシステムをつくりました。

その中で一番大事なのは、大学にとっての図書館です。図書館を24時間・365日開ける。これは私の強い意志でした。もちろん県が設置した公立大学法人として出発しましたから色々制約もありましたが、コンビニが24時間開けているのに、どうして図書館が24時間開けられないかという一言で県も了承してくれました。

図書館が如何に重要かということ自体を、実は私自身は東京外国語大学や東京大学の図書館など自分が学んだところで経験したのではなく、海外で経験しました。一つはオーストラリア国立大学 (Australian National University) です。ここで私は学位論文を一年間執筆し、中央公論社から『中ソ対立と現代―戦後アジアの再考察』(1978)という本になりました。とにかくメンジス・ライブラリー (Menzies Library) とこののがありまして、あそこはリサーチ・スクールですから研究中心でもあるんですけれど、その図書館から借りられるだけの本を借りて、机の脇に置いて執筆しました。その図書館にはなんとオーストラリアなのに、中国やロシア(当時はソ連)に関する資料がほとんど揃っている。それからアメリカの外交文書 (Foreign Relations of the United States) も全部揃っていましたから、これは本当に図書館らしいんです。図書館というものが如何に研究にとって利便性があるかってことです。これを体験しました。



キャンパス全景

るのは、図書室、図書を書庫に入れてある、言わば倉庫なんです。

一時が万事そういう事だったものから、図書館を使いやすい、機能的なライブラリーにしようと思いました。その為、東京外国語大学の時には私が学長でキャンパス移転をやりましたので、図書館はかなり力を入れました。A I U図書館もぜひ居心地の良い図書館にしたい。全て秋田杉をメインにしています。これも県議会が色々言って予算を減らしたために、逆に僕はしめたと思いました。つまり図書館ですと、重量とか建築基準法から言って、鉄筋で普通作るんですけど、そこを少し時間は掛かったけれど最終的には建築基準法をなんとかクリアし、消防法もクリアして、今の図書館に漕ぎ着けました。

もう一つの体験は、UCSD(カルフォルニア大学サンディエゴ校)の School of International Relations & Pacific Studies というリサーチスクールでした。そこに専用の図書館がありました。この図書館は機能的で良く本や雑誌等が揃っているんです。このような点で、図書館と言うものは、如何に教育研究にとって重要かを、痛感したんです。

日本に帰ってくると、東京大学図書館に行っても、探している本がなかなか出てこない。次にまた国会図書館に行っても待たされて、そう言った利便性からして、あっちこっちの図書館、たとえば日比谷図書館にこの本はあるかとか、図書館同士で貸出とかできるんですが、やはり時間がかかる。そういうことからすると図書館じゃないです。各大学にある

できたからには、とにかく開放的にしようと、誰でも入れます。このキャンパスを見ていただければ判ると思うんですが、正門も裏門も塀や垣根もない。何処からでも入れるんですよ。これは、図書館だけではなくて、キャンパス全てがそうです。授業も公開します。そういう意味で、図書館が如何に重要かを身をもって体験したことを、A I Uで初めて実現することが出来ました。

—大学のプログラム、カリキュラムについて、国際教養大学ならではの特徴、特色をご案内ください。

中嶋 日本の学生はあまり勉強をしません。図書館に行っても、居眠りする場所であつたり、人と会う場所であつたりします。

A I Uの場合、アサインメント(宿



言語異文化学習センター

題)が凄いですから、まず入学直後から学ぶ E A P (English for Academic Purposes) でも数冊の本を、明日までに読まなければいけないとか。まあアメリカ並みの課題が結構出されています。その場合にも図書館がフルに活用され、学生が喜んで使っています。図書館が朝までやっているのは非常に良いことで、キャンパス内での時間の割り振りが出来るのです。

私自身がオーストラリアやアメリカで体験した理想のキャンパスライフに近いのかと思います。自然環境もいいです。学長室から歩いて一分で森があり、そこには水芭蕉の群落もあります。こんな環境はなかなかないですね。

外国語の勉強も、図書館の隣に言語異文化学習センター(LDIC: Language

Development and Intercultural Studies Center)があり、自学自習が出来ます。例えば、CNN放送を録音(録画)してありますので、何回でも見る・聞ける出来ます。

—先生ご自身の留学中の体験が、反映されていると言っていますね。

中嶋 外国語学習については、徹底的に方法論を変えなきゃいけないということを実現しています。僕は良く国際会議にも出ますが、日本人はほとんど発言しない。黙ってばかりで。この間シンガポールで私が基調講演をやった会議に日本人は30名位来てただけで、午前中は高等教育に関するセッションだったんだけど、誰も発言しないんです。それはやっぱり語学力が弱いからということが大きい。本学では、入学式前後の新入生オリエンテーションでTOEFLのテストをして、能力別にクラス編成をするんです。これは非常に良いですね。クラス分けしてそこからどんどん伸びるものは伸ばす。日本の英語教育の悪いところは、能力別編成をしないことです。皆同じクラスに入れちゃって、皆で少しずつ訳して、それでテストして終了です。本学はそこも違いますし、耳から聞いて覚えるという才能教育(スズキ・メソッド)の方法を採り入れています。音楽の幼児教育段階での指導方法では、一度覚えたことは一生忘れないという実例があります。

ところが、従来の英語教育は、まずは、文法・スペル・発音が正しいかとかから入るでしょう。そんなことから入るから話せないんです。まず、とにかく口から喋ってみなさい。言ってみれば、単

語・ボキャブラリーを並べるだけでも良い訳です。それで相手は解りますからネ。そこから対話が成り立ちます。A I Uでは根本的に英語教育が変わっていると思います。

—リベラル・アーツを、大学の理念や人材育成の根本に据えられております経緯他をご案内下さい。

中嶋 日本には古くは旧制中学等、旧制高校からの教養教育の伝統があったのですが、それが皆な消えちゃっているんです。今では18歳や19歳の学生を初めから狭い部屋に閉じ込めて、一回入ったらズーッと煙突を登って行かないやいけないんです。ここはICUと共通しているんですが、A I Uはレイター・スペシャライゼーションって言うて入るときには狭い部屋に閉じ込めないのです。日本のほとんどの大学では、入学時から学部、学科に分けちゃうでしょ。適性があるかどうかも分からない。これも日本の大学の大きな弊害だと思います。

やはりアンダーグラデュエート(Undergraduate)、いわゆる学部教育においては、何と言っても教養教育が大事だと思んです。グローバル化、国際化の時代ですから、外国語の運用能力、特に英語力ですね。それを含めてインターナショナル・リベラルアーツって言うてますけれども、それが「国際教養」という新しいコンセプトを立ち上げた理由です。例えば具体的にあげると、音楽・芸術論では世界的なヴァイオリニストが、弾きながら教えています。それから美術の科目も大切です。今度入った新しい先生はフランス語も受け持っていますが、彼

女の博士論文は、パリのオペラ座の天井にシヤガールの絵があるんですが、散々な反対があつて、アンドレ・マルローが文化大臣の時に、最終的に彼がOKを出したんだけど、それをまとめてソルボンヌで博士の学位を取った人が美術史を教えます。このように専門的な深い教養を学べるようにしております。リベラルアーツは、アーツ・アンド・サイエンス(Arts and Sciences)とも言いますから、理系の化学、生物、物理の実験も含めてカリキュラムに組み込んでいきます。そう言った大学ってあまりないと思います。

前半にキチンと教養教育を行います。やはり大学にとって一番重要なものはカリキュラムなんですネ。カリキュラムの中身で勝負している大学は少なく、大学の歴史とか大きさとか伝統なんですネ。A I Uは正にカリキュラムで勝負しています。ですからカリキュラム作りには凄く意を込めておりますし、私の方針があつてデモグラフィ(人口学)は非常に大事な学問分野だけれども、おそらく日本の大学で人口学の授業があるのはほんの僅かだと思います。また、これだけ文明が衝突する時代ですから、紛争予防論もやっているんですよ。明石康さんが正に国連次長の体験を踏まえて教えています。世界の状況から見た、人口問題や地球環境、安全保障に関しての教養教育をA I Uでは組み立てています。

それから、更に留学があります。学生全員が留学しますし、提携校とは単位を互換しますので、こちら側もグローバル化しなければなりません。その為にセメ

スター制を採用しているのは非常に便利です。それから秋入学もやっています。この9月には、160名の留学生が来るんです。こちらからも出向くわけですから、あちらかも来るんです。それらの全ての結果が就職であつて、はじめから就職が良い大学だつて事は言つてもらつては困るんです。私自身も戒めているんですネ。だから、そういう意味からすると偏差値だけ高くて、モヤシつ子みたいな受験・受験できた学生だけで大学が成り立つようにならないよう工夫しなきゃいけないと思つています。

—最後に、中嶋先生が、教育にかける情熱の源泉は、

中嶋 学生は可愛いですからネ。東京外国語大学でも中嶋ゼミはまとまりがあつて、ゼミ機関誌『歴史と未来』を約40年

にわたつてずっと出してきました。やはり若者を育てるつて言うことは教育の原点ですよネ。「教えて之を育つ」つていう育てることが大事ですネ。それは僕らがやらないと、日本がダメになっちゃうと言う気持ちがあります。

日本の教育は教えることはするんだけど、育てることに關しては疎かにしていると思うんです。ですからA I Uは、大学のシステムやすべての文章を、「研究・教育」ではなく、「教育・研究」にしています。A I Uはそういう意味での教育中心の大学です。それが本来学部のあるべき姿だと思います。

さつきも言つたように学部教育というのは、リベラルアーツが重要視されなければいけない。日本の大学は、本当にグローバル・スタンダードに合っていない。英語で授業がやれないと、日本語が出来る人しか日本に來れないことになるんです。この壁をぶち破つていかなければいけない。

それから僕個人は、アンサンブルでヴァイオリンを弾くんだけれども、『音楽は生きる力』(西村書店)という私の本にも書いてあるんですけど、全てが終つて、あー疲れたつていう時に弾けるのは、僕にとっては幸せです。恩師の鈴木鎮一先生に感謝しなければいけない。子どもの頃松本音楽院で教わりました。これも一つ生きる源泉になつてます。それから一年に一回、北アルプスに登ります。それから時々スケッチもします。そんなことも源泉になつています。

—本日は、ありがとうございます。

(取材) 2010年7月29日国際教養大学学長室にて



レクチャーホール

「24時間オープン図書館」の

運営と実績

国際教養大学 図書館長

勝又 美智雄



国際教養大学は2004年春の開学以来「図書館の24時間・365日オープン」という全国でもほとんど例のないユニークな制度を実施しています。その最大の理由はまず「理想的な大学にはどんな図書館が必要か」という原理的な質問から引き出された結論だからです。しかも本学が事実上の全寮制に近く、在学生の8割以上がキャンパス内で生活しているため、学生がいつでも好きなだけ勉強できる環境を整備するのは当然だ、という判断からです。キャンパス内の寮やアパートで一人黙々と勉強するよりも、図書館の大部屋で大勢の仲間が勉強している姿を見ながら、それを励みに自分もがんばる、という学生が数多くいます。平均すると、在校生の2〜3割が深夜まで図書館を利用しています。在学生のほぼ全員が「24時間使える図書館」をきわめて高く評価していることが、毎年の学生意識調査からもはっきりと現れています。

「キャンパスは多文化共生空間」

本学は入学定員が150人（2011年度から175人に増員）という全国でも最小規模の大学です。毎年10倍以上の競争率で、実際には全国から170人くらい入学しています。在学生は2010年秋現在、約850人。うち日本人学生約170人は海外の提携大学（世界31カ国で11校）に1年間の留学中で、その代わりに提携校からの交換留学生がやはり160人ほど在籍しています。つまり学内には日本人学生が510人、留学生が170人いるわけで、ちょうど日本人3人に留学生が1人という割合で、まさに中嶋嶺雄学長の提唱している「国際色豊かな異文化共生空間」が実現しています。本学の1年生は全寮制で、2年生以

上は学外に住んでもいいのですが、2年生以降も学内の寮、アパートに住みたいという希望が多く、そのため寮を相当増設し、現在は在校生の8割以上が学内に住んでいます。また留学生は全員、日本人学生と寮で共同生活をするることになっています。

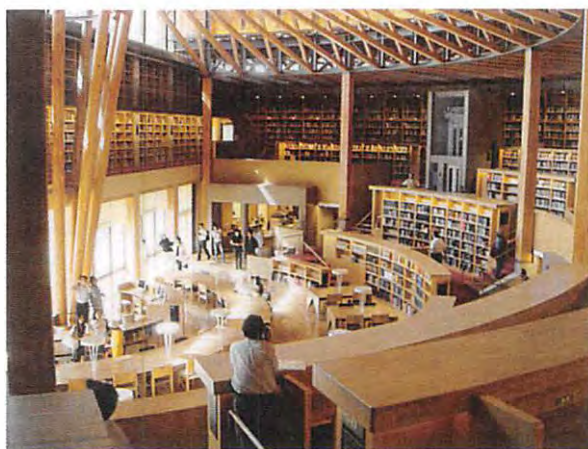
開学当初にあった図書館は規模が小さく手狭だったため、「国際的に通用する立派な図書館を備えたい」というのが開学以来の念願で、2008年春に総工費約10億円で完成しました。県議会の要望で地元の秋田杉を使った木造・鉄筋コンクリート造りとし、延べ床面積4千平方メートル、「本のコロシウム」をテーマとしたデザインで、天井までの高さ12メートル、半径22メートルの半円形のホールになっています。秋田は雪国なので、年間を通じて雨や雪にわずらわされずに教室、食堂、寮と図書館はすべて2階部分で「スカイウォーク」と呼ぶ渡り廊下でつながっています。蔵書数は現在、洋書が4万3千冊、和書が2万冊と、大学としてはまだまだ極めて少ないのですが、洋書が4万冊以上あるというのは、本学の自慢でもあります。新図書館は13万冊収容が可能で、今後も洋書7割、和書3割というペースを守っていこうと考えています。本の購入予算が限られているため、和書については購入を学生の教育向けにふさわしいものに限っています。それ以外の一般向け、あるいは娯楽性の高い書籍・雑誌類については、蔵書70万冊の秋田県立図書館と協定を結ん

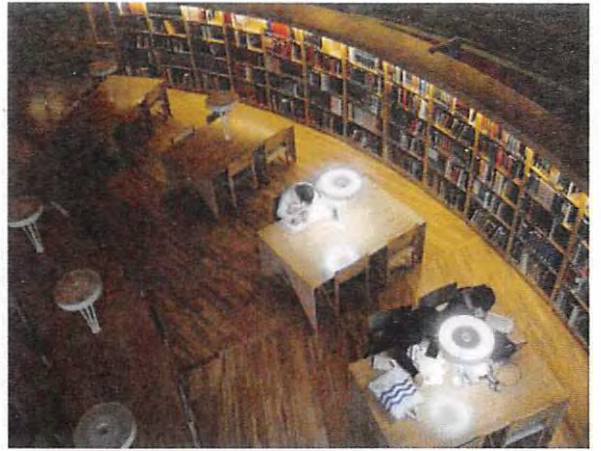


で、08年から自由に借りられるようにしています。この県立図書館との交流協定は本学独自のもので、学生たちは本学のパソコン端末から県立図書館の蔵書リストに簡単にアクセスでき、週3回の宅急便で自由に借り出しが出来るので、その利用状況も徐々に高まっています。

図書館の閲覧席は300席あり、さらに併設しているパソコン室には180台のパソコンがあり、学生たちはもっぱら図書館とパソコン室をひんぱんに行き来して宿題やレポート作成にいそしんでいます。

図書館の利用者数は年々増え続けていて、09年度は11万6千人、学外的一般利用者も400人近くいました（カ





に切り替わって、翌日からの授業に備えて図書館で予習する学生がかなり多くなっています。また中間試験、期末試験の時期になると平日、週末を問わず、どの時間帯も図書館にいる学生数が倍増しています。

毎年、新入生を迎えた春学期には図書館で徹夜してしまう学生がいますが、教員たちから「午前中の授業に身が入らないと困るので徹夜させないように」との要望が出ています。そこで深夜には夜勤の職員や巡回の警備員が、うたた寝している学生に「そろそろ引き揚げたらどうか」と声をかけるようにしています。ただし、学生の中には夕方いったん早く寝てから深夜に起きて図書館に来る者もいて、アンケート調査でも「24時間いつでも自由に利用できるのが素晴らしい」という声が圧倒的に多いのです。

ちなみにこの新図書館は優れたデザインときめ細かな設備、使い勝手の良さで09年に日本建築家協会賞、10年には国際建築賞を受賞して、今や秋田の新名所として、ほぼ毎日のように見学者、観察団が多数訪れてきています。

自然に「安全・安心」が実現

「24時間オープン」を実現させるのに、管理責任者としてまず気を遣ったのは安全確保です。そこで利用実態を確認するため、開学初年度には職員を文字通り24時間張り付け、翌年は午前2時まで配置しました。そして学生の時間

別の利用状況を詳しく調べた上、その需要に合わせて、06年度からは午前0時までカウンター（窓口）業務をするという勤務体制に落ち着きました。これは本学ではほぼ毎日宿題が出て、視聴覚教材の事前のチェックやレポートの作成が課せられているためです。学生たちは深夜まで時間単位で教材用のCD、DVDを借り出しているため、その応対にカウンター業務が必要という事情からきています。

さらに、午前0時以降、午前8時半までは、新図書館の入口に設置した警備員室に警備員が常駐して、1時間ごとに館内を見回って保安対策をとっています。

組織としては館長の下に常勤職員（司書）が2人、嘱託が3人という態勢で6年間やってきましたが、この春からは業務委託を導入し、委託スタッフが5人で朝・午後・夜のシフトで窓口業務をこなしています。

大学は秋田市の郊外で飛行場の近く、人里離れた山林の中で、前は広大な県立スポーツ公園、徒歩圏内には地元のコンビニが1軒あるだけで、飲み屋もゲームセンターも喫茶店ありません。

それだけに欧米の人里離れた森林の中にある大学に似て、勉強するにはまさに最高の環境と言えますが、同時に図書館には古今の名作映画やハリウッドの人気映画、教養番組のDVD、音楽CDも2千本以上備え、学生たちがひんぱんに借り出して楽しんでいます。

本学の学生たちは総じて非常にマ

ナーが良く、深夜に大声で騒ぐような迷惑行為や器物を破損するようなトラブル、事故などもほとんどありません。学外者の入場は24時間ではなく午後10時までに限っていますが、たまに不審者がいると、学生がすぐに職員や警備員に連絡する態勢ができていて、常に「安心と安全」が保たれています。

図書館の利用方法については各年度版の学生便覧に細かく明示したうえ、入学時のオリエンテーションでわかりやすく紹介しています。同時に新入生には「図書館リサーチ」を授業科目の中に組み込んでいて、館内の蔵書類の検索はもちろん、インターネットを使って国内国外の政府機関、政治・経済・社会団体、各種研究機関のホームページなどへアクセスして必要な情報を入力し、レポートにまとめるよう指導しています。そうしたことが学生たちにとって、図書館を気軽に使うことが、ごく当たり前の生活の一部になっているのだと思います。本学の学生たちの意識調査で「大学生活満足度」が常に80%以上と高いのは、この「いつでも気軽に使える図書館」が大きな理由のひとつになっています。

「24時間オープン図書館」という、全国でも例のない試みに挑戦しているわけですが、この6年半を振り返ってみて、「万事きわめて順調」というのが、館長としての私の率直な印象であり、実感です。

興味のある方は、いつでも気軽に outcomes 出てください。歓迎します。